

えんぶ 偃武の世来たる—大坂の陣終戦400年—

慶長20年(1615年、7月に改元して元和元年)5月8日、天下人豊臣秀吉が心血を注いで築いた大坂城が落城します。秀吉の遺児豊臣秀頼とその母淀君をはじめ、近侍する人々が城と命運を共にしました。攻撃側は、秀吉の後を襲い天下人となった大御所徳川家康とその子で2代将軍秀忠。豊臣と徳川が天下の覇権を争った最終戦でした。一方で戦後は、「元和偃武」(「偃武」とは武器を伏せて用いないこと＝太平の世になること)と呼ばれ、徳川氏による太平の世が到来しました。

大坂の陣が終結して400年となる今年。今回の資料展示は、この戦いに関する館蔵資料を紹介いたします。

冬の陣

家康出陣!

【資料1】本多正純書状 慶長19年(1614)10月18日

(毛利家文庫11 軍事3)

慶長19年10月、大坂方の大野治長、その弟大野治房らが牢人を募って反徳川の旗幟を鮮明にします。一方で、秀頼を補佐してきた片桐且元や弟の貞隆、石川貞政らは大坂城を退去しました。

こうした動きを受けて大御所家康は、10月11日、その居所駿府を出立、上方へ向かいます。大坂冬の陣の始まりです。

毛利に出兵命令!

【資料2】江戸幕府年寄奉書 慶長19年(1614)10月24日

(毛利家文庫11 軍事3)

家康は、10月23日に京都に到着、将軍秀忠ら後続の軍勢の到着を待つこととなります。また家康は、側近の本多正純を介して、毛利氏へ大坂出陣の命を下しています。

大御所に続け!

【資料3】江戸幕府年寄連署奉書 慶長19年(1614)11月10日

(毛利家文庫2 幕府6)

10月23日に江戸を発した将軍秀忠は、11月10日伏見に到着しています。また毛利秀就に対して、将軍に近侍する幕府年寄(後の老中)からも出陣が促されています。

夏の陣

先陣の大將は毛利秀元！

【資料4】毛利宗瑞・秀就連署状写 慶長20年（1615）4月17日

（毛利家文庫遠用物近世前期 255）

毛利宗瑞（輝元）・秀就親子は、大坂への出兵にあたり、毛利秀元を先陣の大將に任じました。その軍勢には、宍戸元次といった一門の人々が加わったようですが、彼らに対する指揮権も秀元に与えています。

なお、夏の陣における毛利軍は秀元の部隊が参戦し、大きな手柄を立てました。

緒戦の報来たる！

【資料5】某氏書状 慶長20年（1615）月日未詳

（毛利家文庫11 軍事5）

家康・秀忠親子の大坂着陣を伝え、毛利秀就の出陣を促した文書です。また、4月29日に岸和田近辺で行われた戦闘（榎井の戦い）の様子が伝えられています。この戦いで、大坂方の「団半右衛門」（塙団右衛門 ばん だんえもんの誤りか）や明石掃部の戦死が報じられています。もっともこの時に明石は参戦していないので、誤報が混じったものと考えられます。戦場での情報が錯綜している様子が窺えます。

また、大坂方からの「廻状」などを持参した者を捉えよとの指示が見えます。豊臣との関係の深い毛利氏に対して、大坂方は必死に味方となるよう説得していたのでしょうか。

大坂落城

【資料6】毛利宗瑞書状 慶長20年（1615）5月15日

（今川家文書 163）

国元にいた毛利宗瑞（輝元）の元に大坂落城の知らせが入りました。これによれば、「5月7日」に秀頼が切腹したとあります。7日には天守が焼失していますので、戦場に立つ人々の目には、この日が落城＝城主自刃と映ったのかも知れません。実際の秀頼自刃は、翌8日のことです。

【大坂陣を知る参考文献】

- 井上安代『豊臣秀頼』（自家版、平成4年）
- 福田千鶴『淀殿—われ太閤の妻となりて—』
（ミネルヴァ書房、平成19年）
- 曾根勇二『大坂の陣と豊臣秀頼』（吉川弘文館、平成25年）
- 福田千鶴『豊臣秀頼』（吉川弘文館、平成26年）

etc.

展示期間

- 【資料1】 5月1日（金）～5月10日（日）
- 【資料2】 5月12日（火）～5月17日（日）
- 【資料3】 5月19日（火）～5月24日（日）
- 【資料4】 5月1日（金）～5月31日（日）
- 【資料5】 5月26日（火）～5月31日（日）
- 【資料6】 5月1日（金）～5月31日（日）